

大陸文学のなかの〈郷愁〉と〈郷土〉

— 『北電』における棧朝男（懸橋浅夫・近東綺十郎） 付・『北電』細目補遺2

Nostalgia and Homeland in 《Tairiku Bungaku》: Kakehashi Asao's Literature in “Hokuden”

戸塚麻子

TOTSUKA Asako

(令和四年十一月四日受理)

抄 録

『北電』は、日中戦争期に北京で発行されていた日本語雑誌であり、日本の国策会社・華北電信電話株式会社の社員会雑誌である。『北電』は、「満洲」文壇で活動し、その後北京へ移動してきた棧朝男（懸橋浅夫・近東綺十郎）が中心になり立ち上げ、第二巻第一〇号まで実質的な編集長を務めた。本稿では、『北電』の新たに発掘した号を加え、棧の北京時代の動向の一斑を明らかにした。また、棧が日本帰国後に『北電』に寄稿したエッセイや小説の分析を行った。小説「郷愁」は、日本人男性とソ連国籍をもつ女性の夫婦が、「満洲」を自らの郷土として選びとる姿を描いている。また、大陸浪人とダンサーの夫婦が更生し、「満洲」建設のために尽力するように描いており、「満洲国」の理念を体現している側面を持つ。しかし、主人公は日本と大陸との間で揺れ動き、帰属すべき郷土を探し求める人物として描かれ、作者・棧の想いが反映されている。

キーワード…『北電』 華北電信電話株式会社 棧朝男 郷愁 「満洲」

はじめに

『北電』は、日中戦争期に北京で発行されていた日本語雑誌であり、日本の国策会社・華北電信電話株式会社の社員会雑誌である。

『北電』は、「満洲」文壇で活動し、その後北京へ移動してきた棧朝男（懸橋浅夫・近東綺十郎）が中心になり立ち上げた。棧は創刊号（一九三九年九月一日発行）から第二巻第一〇号（一九四〇年一〇月一日発行）まで実質上の編集長を務めている¹。「東京出張所」²に異動した後も、しばしば『北電』に寄稿していた。棧については、「満洲」時代に関する先行研究はあるものの、北京時代に言及したものはごくわずかであり、また誤りも多い。本稿では、『北電』の日本国内所蔵、中国国家図書館所蔵分に、筆者が購入したものに加え、それらを元に棧の動向の一斑を明らかにする。また、エッセイや長篇小説「郷愁」について述べてみたい。

なお、『北電』の参照号は以下の通りである。創刊号（一九三九年九月一日発行）↪第四巻第二号（一九四二年二月一日発行）、第四巻第二二号（一九四二年二月一日発行）、第五巻第四号・通巻第四四号（一九四三年四月一日発行）、第五巻第五号・通巻第四五号（同年五月一日発行）、第五巻第八号・通巻第四八号（一九四三年八月一日発行）↪第五巻第二二号・通巻第五二二号（同年一月一日発行）、第六巻第四号・通巻第五五号（昭和一九年四月一日発行）↪第六巻第一〇号・通巻第六一〇号（昭和一九年二月一日発行）。

一 棧朝男（懸橋浅夫・近東綺十郎）について

棧朝男とはどのような人物であろうか。「満洲浪漫」執筆者略歴³には以下のように記されている。

近東綺十郎

本名、懸橋浅夫。一九二九年長春に渡ったあと、各地を転々とする。当初、大連の同人雑誌に詩や小説を書いていた。一九三七年ハルビン日日新聞社に入り、三八年初夏、北京の華北交通公社に転勤。のち、四二年には交通公社東京支社に移り、勤務の傍ら東京文話会支部長を務める。（傍線引用者、以後同。）

いくつか補足と修正をしておきたい。

まず、本名を「懸橋浅夫」としているが、「棧朝男」である可能性が高い。棧について言及した代表的な著作としては、大内隆雄『満洲文学二十年』（国民画報社、一九四四年）と、北村謙次郎の『北辺慕情記 長篇随筆』（大学書房、一九六〇年）とがある。両者ともに「満洲」文壇で活躍した人物である。大内は前掲書のなかで、棧を『新京日日新聞』に誘い、ともに長春の文芸界を活躍させた様子などを記しており、また、棧の詩を引用して紹介する等、高く評価していたことがうかがえる。北村は、「満洲」時代には直接面識はなく、棧の日本帰国後に交流を持った。そのため、帰国前については大内前掲書を参考にした箇所が多い。

大内は「懸橋浅夫は近東綺十郎」であると述べているものの、本名については言及していない⁴。また、北村は前掲書のなかで、

十五章の見出しに「近東綺十郎（棧朝男）」と記している。本名であると明言はしていないが、「棧朝男」を本名と考えていたのではなからうか。

また、近年では王占一（Zhangyi WANG）が、「満洲国」の中のスパイ／スパイ戦―スパイ小説「間諜茉莉」論⁵のなかで、以下のように述べている。

筆者の調査によれば、近東綺十郎はペンネームであり、その本名は棧朝男である。「中略」近東は詩と小説を創作するだけでなく、大連における戯曲運動にも参加し、その後、奉天、ハルビン、北京に転居し、新聞記者になったこともある。

王は本名を「棧朝男」としているが、残念ながら根拠資料は示されていない。

ところで、『北電』では、「棧朝男」「懸橋浅夫」「近東綺十郎」の三つの名前が使用されている。棧は『北電』編集者、すなわち華北電信電話株式会社社員としての仕事は「棧朝男」（または「棧生」）の署名を用いている。入社当初は同社が官営であったこともあり⁶、本名を使っていた可能性が高い。よって、本稿では主な表記として「棧朝男」を用いる⁷。

次に、棧が北京に来た時期と去った時期とについて、確認しておきたい。以下は懸橋浅夫「北電と小生」『北電』（第三巻第九号、二七頁）である。

雑誌発行と言ふことは、会社設立と同時に言ふ計画であつて昭

和十三年五月に当時の華北電政総局に入社した時から、私に果された仕事の全部であつた。私に言はずればその為に哈爾濱日新聞社を辞したのである。

ここから、棧がハルビンから北京に移動した時期は一九三八年の五月頃であったこと、華北電政総局（のちの華北電信電話株式会社）の雑誌を創刊し発行するために北京に来たことがわかる。ちなみに、華北電政総局は同年八月一日付で、官営から民営へと再編され、「華北電信電話株式会社」、通称華北電電になった⁸。「満洲浪漫」執筆者略歴」の記述は、北村前掲書に、「昭和十三年初夏には、近東綺十郎は哈爾濱から北京の華北交通公社に転じた。」（五八頁）とあるのを、そのまま使用したものであろう。ちなみに、「華北交通公社」というものは存在せず、正しくは「華北交通株式会社」である⁹。

次いで、北京から内地へ異動した時期である。『北電』一九四一年一〇月一日発行の第二巻第一〇号の編集後記にあたる「主筆雑記」に、棧の東京出張所への異動について、棧自身や他の編集員が記しており、この前後に北京を去ったことがわかる。

以上、棧の北京での動向の一部を明らかにした。次章では、棧が『北電』に執筆したものの概要について述べたい。

二 棧朝男の『北電』掲載記事概要

棧が『北電』に掲載した小説、詩歌、エッセイ等の一覧は以下の通りである。目次または本文にジャンル名の記載がある場合は

へ）内に記した。

浅夫「黄城句会マツ月九月例会」

第二号、一九三九年一〇月一日発行

懸橋生「唐山訪問記」第四号、一九三九年二月一日発行

浅夫「山崎悟朗氏送別 黄城句会」

第二卷第四号、一九四〇年四月一日発行

近東綺十郎「文芸同好会の提唱」〈随筆〉

第二卷第五号、一九四〇年五月一日発行

近東綺十郎「秋風章」〈詩〉

第二卷第一〇号、一九四〇年一〇月一日発行

懸橋浅夫「杳かなる追憶」

第三卷第一号、一九四一年一月一日発行

近東綺十郎「春を待つ心」

第三卷第四号、一九四一年四月一日発行

懸橋浅夫「北電と小生」

第三卷第九号、一九四一年九月一日発行

懸橋浅夫『郷愁』〈長篇小説〉

第五卷第四号、一九四三年四月一日発行

第五卷第一〇号、一九四三年一〇月一日発行

*第三回（第五卷第六号）、第四回（第五卷第七号）は未見。

その他、編集後記にあたる「朱筆雑記」を、創刊号から第二卷第一〇号までほぼ毎号執筆している。棧はこの号を最後に東京に異動となった。また、編集者として参加した座談会等があるが、

いずれも署名は「棧朝男」または「棧生」である。

まず、第二号と第二卷第四号では、社内の句会である黄城句会に参加している。棧が俳句を詠んでいたことがわかる資料だが、黄城句会とは当時社内での唯一の文芸関係の同好会であり、他の号に俳句を載せていないことから、それほど句作に熱心であったようには思われない。第二卷第四号掲載の「三昧先生選句」は、「ひそやかに一人住まへり目ばり剥ぐ」「汚れたる洋車に乗りぬ春日和」等である。選句から漏れた句に、「病む妻を遠く送りて春浅き」があり、妻が病気であること、淋しい一人暮らしのなかにも春が訪れていることが感じられる。「一人住まへ」ることと温かくない防寒のための「目ばり」をはがすという行為、汚れた人力車と春日和、病気の妻と春というように、一見対立する言葉を入れるというところに棧の特徴がみてとれよう。なお、三昧先生とは、北京俳句界で有名なホトトギス系俳人の江川三昧（本名・江川一三、華北交通株式会社）である。

次に、第二卷第五号の「文芸同好会の提唱」では、まず華北電電のそれぞれの支部に文芸同好会を作り、「発表機関紙」として「我等の社員雑誌「北電」を活用しようと呼びかけている。

一九四〇年一〇月一日発行の第二卷第一〇号では、詩「秋風章」を近東綺十郎の名で掲載している。棧が「北電」に掲載した唯一の詩であるが、大内が著書のなかで転載し紹介している棧の他の詩に比べ、レベルは高くない。この号の「朱筆雑記」のなかで、急に内地への転勤命令が出たことを述べ、「次号からは私も今までのプロデューサーとしてではなく、『北電愛読者の一人』としての立場から、本紙の成長のために小さい力を捧げるつもりであり

ます。」と述べている。その後、エッセイ「杳かなる追憶」「春を待つ心」「北電と小生」と、連載小説「郷愁」を寄稿した。次章では、「杳かなる追憶」「春を待つ心」についてみていきたい。

三 「杳かなる追憶」「春を待つ心」

「杳かなる追憶」と「春を待つ心」は、ともに大陸に住む日本人の故郷への想いを書いている点で共通している。

まず、「杳かなる追憶」は、棧が日本帰国後に『北電』に載せた最初のものである。掲載号の第三巻第一号は「新年特別号」であり、特集「ふるさとの正月風土記」が組まれていた。

故郷を出てから十二年になる。正確に言へば中学を卒へた十八歳が、私の故郷に於る最後の正月で、思へば実に遠い追憶でしかない。

このようにはじまる「杳かなる追憶」は、(一)〜(三)の三章からなっており、(一)(二)では、故郷・長崎での正月の思い出が語られる。右の引用部分から、棧が一八歳で長崎を去り、それから一二年経つことがわかる。また、男三人兄弟の長男で、父が中風になってからは元旦に挨拶周りをしていたことも語られている。

続く(三)では、長崎の街の特殊性が語られ、次のように続く。

故郷を離れて長くなると、その記憶も愛着と、もに薄らいで

来たかに思ひ、時に故郷を失つた人のような侘しい感慨につき当ることもあるが、正月などが来て異郷の、謂はゞ味気ない行事を繰り返す頃になると、杳かな思ひ出も、鮮やかに身近く呼び起され「故郷忘じ難し」とか「故里は遠きにありておもふもの」と言つた生温い言葉の世界に我慢が出来なくなり、少年の日の追憶を伴ふ長崎の正月を体験したい欲望に駆られないでもない。

これは大陸日本人の「悲しい性格」かも知れない。興味と言つた一種の好奇的なものから言へば、満洲や北京の、その国の人たちの行事に好感を持つてゐる筈の自分であるのに、不可思議な人間の弱さである。

棧は「長崎の正月を体験したい欲望に駆られないでもない」というように、「故郷」への想いを韜晦気味に語っているが、ここには強い望郷の想いがみてとれよう。そして、それを「大陸日本人の「悲しい性格」として一般化する。大陸の文化に興味や好感を持っていたとしても、結局は日本への想いを断ち切ることはできない、それが「不可思議な人間の弱さ」だと述べているのである。棧は、こうした「故郷」への想いを、三箇月後に掲載した「春を待つ心」では、「郷愁」という言葉を用いて描いている。

「春を待つ心」は、東京にいる「私」(または「僕」)が、大陸に住む友人A君に宛てた三通の手紙という形式をとっている(目次・本文ともにジャンル名は記されていない)。

一通目の手紙では、「満洲」の冬は暖房で室温が高いため肌が弱くなり、東京の寒さに慣れず風邪ばかりひいていることが語ら

れる。「東洋の楽園のような母国だと、大陸十幾年限りない郷愁を寄せ、その故国に帰り住むことに限りない期待を抱いて、懐しい土を踏んだ僕であつたが、これではまるで夢を破りに来たようなものであつたと、一寸臍でも嘔みたい気がしなくてもない」。

しかし、それでも大陸で春を待望し、「春の息吹や、春の表情」を書こうとしてきた「私」は、今年も春を捉えたいと思つている。

二通目の手紙では、病気の妻について語られる。妻は結核で入院しており、月収の大半を病院に支払い、困窮していること、「大陸で経験したことのない窮迫が、時には流涕者のような頼りない感情へ私を追ひつめた」と語る。「私」は「(大陸にゐたら……)」とも思う。

妻の病気が原因とはいえ、故国に戻つたことが経済的に窮乏をまねき、却つて「流涕者のように」な逆転現象を招いてしまつていふことを告白しているといえる。

三つ目の手紙では、「私」は武蔵野にある妻の病院に見舞いに出かけ、その行く道で春の兆しをいたるところに見出す。そして、春を待望する気持ちは、妻の病気の快癒への祈願と重ね合わされて描かれていくのだが、希望を見出すことはできない。

「春を待つ心」では、待望していた故国日本への帰国が、必ずしも期待を満たすものではなく、かえつて困窮を招いている様子が描かれる。「大陸十幾年限りない郷愁」は裏切られ、「流涕者のような頼りない感情」さえ抱かせる。満足よりむしろ日本に帰らず「大陸にゐたら」という感慨を持つに至るのである。ここには単に経済的な原因による「頼りない感情」ではなく、(大陸への「郷愁」がみてとれよう。

このような、内地へ戻つてきた者のもつ外地への郷愁は、この後どのような形をとり展開されていくだろうか。次章では長篇小説「郷愁」をみていきたい。

四 長篇小説「郷愁」

「郷愁」は、第五巻第四号(一九四三年四月一日発行)より全七回にわたつて掲載された。現在発見されている『北電』には他に四回以上の連載小説はなく、同誌唯一の長篇小説だった可能性もある。梗概は以下の通りである。

一九三五年二月末の「ハルビン」。シベリア新報社に勤務する記者・矢部は、北満鉄道が「満洲国」へ譲渡されるという噂が流れ、そこで働くロシア人とその家族の間に動揺が走っているのを知る。矢部の従兄・金谷純輔は、ソ連国籍で「ハルビン」生まれの女性・ライヤと結婚しており、ライヤの叔父・ミハイロフは北満鉄道の工場で働く職工であつた。ミハイロフは妻と「ハルビン」で生まれた子供たちとともに、故郷のウクライナに帰ることを決め、実の娘のように可愛がつているライヤにも、一緒に帰ることを勧める。ライヤは、愛する金谷と生きるため「満洲」に残るのか、別れてミハイロフ叔父たちと「満洲」を去るのか、結論を下すことができずに悩む。他方、ライヤの妹・カーチャは、既にソ連籍を抜けて白系ロシア人となつており、「満洲」に残ることにためらいがない。

松花江(ウスリー)の解氷がはじまる前日、矢部は友人・重藤とホール「オレゴン」を訪れる。重藤は、ダンサーの三岸セイ子

(芸名・音羽真珠)と一夜を共にしたことがあり、恋人のような関係になっていた。矢部は、同じくそこに勤務するダンサー・エリに好意を抱き、エリもまた死んだ弟と同じ学校に通っていた矢部に親しみを持つ。

ライヤはついに「満洲」に残り、金谷とともに生きる決心をするが、金谷は突然会社から出張を命じられてしまい、四月二〇日、同江(黒竜江省にあるソ連との国境の町)へと旅立っていく。そして、その三日後、ミハイロフ叔父の一家は帰還列車でウクライナへと出発し、ライヤは悲嘆にくれる。

矢部が久しぶりにオレゴンを訪れると、支配人の堀から、重藤にトラブルが起こりかけていると聞かされる。セイ子の元に突然やぐざもの元夫・江川がやってきて、それ以来仕事を休んでいるという。セイ子は大金を渡して江川と別れたつもりだったが、江川は籍を抜いておらず、姦通罪を理由に重藤を脅迫し、金銭を引き出そうとする。ところが、偶然にも江川は、矢部が長春で新聞記者をしていたときに面倒をみた人物だった。矢部が間に入って、江川をなだめ、セイ子は江川と復縁し、重藤と別れることになった。

五月に入り、金谷から矢部に手紙が届く。そこには、一生ライヤと暮らし、「この土へ骨を埋め」る決意が書かれていた。他方、江川は牡丹江の土木関係の仕事を得て、セイ子とともに旅立っていく。江川とセイ子を見送りにきたエリは、日本にいる老母のために日本へ帰ると言い、矢部は胸をしめつけられるような「望郷の想ひ」を抱くのであった。

以上が、「郷愁」の梗概である。連載第三回と第四回は欠号に

より未見であるため、第五号以降の内容から推測して補った。第三回と第四回では、矢部と重藤との関係(おそらく大学の同期)や重藤とセイ子との関係が描かれ、重藤が矢部にセイ子を紹介するためにオレゴンに誘い、矢部がエリに出会う場面等が書かれていたはずである。また、ライヤが「満洲」に残る決意をするところも描かれていたと考えられる。

「郷愁」では、北滿鉄道讓渡協定調印前後の「ハルビン」を舞台に、二つの恋愛が描かれている。ライヤと金谷、セイ子と重藤、江川の三角関係、そして矢部とエリである。このうちもっとも重い比重で書かれているのはライヤと金谷である。国際結婚につきものの文化の違いによる摩擦をはじめ、高給取りである日本人男性とそれ以外の民族の経済格差等が、北滿鉄道の問題と絡み合わせて描かれる。次に、セイ子と江川は大陸を流れ歩く日本人の典型として描かれる。最後に矢部とエリとは、互いに好意を抱きながらも、何も始まらずに終わってしまう。末尾におけるエリとの別れは、矢部に日本への郷愁を掻き立てるものとしてある。この三つの物語が交互に書かれるが、その合間を縫うように「ハルビン」の街や松花江(ウスリー)等が描かれていく。

より詳しくみていきたい。ライヤと金谷の夫婦を眺める矢部は、国際結婚の難しさを実感する。矢部は時折おでん屋に行く金谷に、日本への「郷愁」を見てとる。金谷がライヤに対し、ウクライナに戻らないでほしい、「満洲」に残ろうと強く言えないのは、ライヤとともに生きて行く自信がないからだろうと矢部は考える。しかし、金谷は出張で同江に行き、ライヤと離れたことで、ライヤへの愛情をはっきりと意識するようになる。矢部に宛てた手紙

のなかで、金谷は「ハルビン」への「郷愁」とライヤへの愛、そしてともに「満洲」の「土に骨を埋め」る決意を語る。「君には胡麻化し切れなかつた郷愁さへも、僕はおでんやで解決し得る方便な男」だとも述べる。つまり、金谷はライヤへの愛を確認することで、ライヤがいる「ハルビン」、ライヤが生まれ育った場所であり、二人の愛を育んだ土地に「郷愁」を感じ、自分の居場所として選択するのである。

このような「郷愁」の描き方は独特で、「満洲国」の「土に骨を埋め」るためには必要なものであろう。金谷・ライヤは、みずからの生きる場所を愛情によって選び取る人たちであり、それが「満洲国」の建設に向かうように描かれているのである。

他方、流れ者の江川とセイ子は、最後に牡丹江へ旅立ち、「今日から満洲国の建設に一役買って立ち上る人たち」(終回)である。彼らは金谷・ライヤのように生きる場所を自主的に選びとるわけではなく、ただ「浮草のように、大陸を流されて歩く日本人」である。こうした当時大陸に大勢いたと思われる典型的な日本人もまた、「満洲国」建設の従事者となるように描かれているのである。そして、矢部は、「あと二年たつたら、母と妹を迎へて、新しい生活に入らう」、「その生活の同伴者として、エリのような女をと」考えており、大陸に根を下ろすつもりでいたが、エリに日本に帰国すると告げられることで揺らいでしまう。エリの帰国は、矢部からも「満洲」から去ることを意味しており、矢部は「僕も一度、日本に帰りたいたい」と感じ、「望郷の想ひが、どつと溢れて来る」のである。

物語はここで終わるが、このあと矢部が、金谷同様「満洲」に

根を下ろす選択をしたかは分からない。「一度、日本に帰」る程度で満足するものなのか、あるいは、日本へ帰国するのか、この結末では明言されていないのである。つまり、金谷・ライヤ夫婦や、また江川・セイ子たちとも異なり、矢部の未来は不確定のまま物語はとじられるといえるだろう。

この作品では、「満洲国」の理念や理想は語られず、棧がどのように考えていたのか直接は書かれていない。しかし、「満洲」の「土に骨を埋め」る決意をした金谷・ライヤ夫婦は、五族協和を体現したものと考えることができる。また、当時大陸にあふれていたような大陸浪人の江川とダンサーのセイ子が、更生して「満洲」建設のために尽力する姿は、「満洲国」の政策にも合致するものである。その意味で作者は、「満洲国」を肯定的に捉えているといえるだろう。しかし、他方で、矢部の未来は未確定であり、「満洲」に残るかどうかも分からないのである。

こうした結末は、前章「春を待つ心」で確認した、〈満洲への郷愁〉からつながる部分があるように思われる。大陸では日本に望郷の想いを抱き、日本に戻れば大陸に〈郷愁〉を覚える。一つの場所に根を下ろすことのできない棧の想いが、主人公の矢部に託されているのではなからうか。

この作品では「ハルビン」の街が、具体的な道路名や建物名とともに詳細に描かれる。なにより、この作品でもっとも印象的なのは松花江(ウスリー)の「武開」(一斉に起こる解氷)の描写である。「急激な気温の上昇に、眠つてゐた松花江が、突然春に目覚め」る。そして人々は解氷を見に江岸に集まってくる。東京に戻った棧の「ハルビン」への〈望郷〉の想い、それこそがこの

作品を書かせた動機なのではないだろうか。「郷愁」という作品に、「満洲」や北京を渡り歩き、「満洲文学」「大陸文学」をつくり上げる志半ばで自らの意思とは関係なく祖国日本に戻ることに変わった棧の、日本と大陸との間で揺れ動き、帰属すべき郷土を探し求める姿を見ることができらるだろう。

以上、「郷愁」について述べてきた。「北電」の未発見の号や、同時期の北京発行雑誌等についての調査により、棧の他の作品も発掘される可能性がある。今後の課題としたい。

¹ 『北電』では、奥付に記される「編輯人」と事実上の編集長は異なっている。

² 第二巻第一〇号、三〇頁。なお、「東京出張所」は副総裁の下部に置かれていたが、一九四二年六月三〇日、総裁直属の「東京支社」に昇格された。北電会編『華北電電事業史』電気通信協会、一九七五年、一〇八一—一〇九頁。

³ 呂元明・鈴木貞美・劉建輝『満洲浪漫 別巻 「満洲浪漫」研究』ゆまに書房、二〇〇二年、一五一頁。

⁴ 一四九頁。

⁵ 『跨境』第九号、二〇一九年、一五三頁。なお、「間諜茉莉」は棧の短篇小説である。

⁶ 前掲『華北電電事業史』、六三頁。華北電政総局は一九三六年一月一日、軍管理下の暫定的な運営機関として設立された。

⁷ なお、『満洲文芸年鑑』第一輯（G氏文学賞委員会、一九三七年）

の「満洲文芸人々名録」では、以下のようにある。「近東綺十郎（懸橋浅夫）／哈爾濱市埠頭区一面街哈爾濱日日新聞社内。昭和四年長春（現新京）に来てから大連、奉天、東京、新京、哈爾濱と何時果てるか分からない放浪を続けてゐます。」（引用は復刻版の『満洲文芸年鑑』第一輯、葦書房、一九九三年、一四二—一四三頁。）おそらく棧自身が記したと思われるこの記述のなかに「棧朝男」はない。これは彼が「満洲」文壇において、主に「近東綺十郎」または「懸橋浅夫」の名で執筆を行っていたためであると思われる。

⁸ 前掲『華北電電事業史』

⁹ なお、華北交通株式会社の社員会雑誌『興亜』については、神谷昌史・戸塚麻子編『華北交通社員会『興亜』1939～1944—占領地北京の日本語雑誌』別巻（金沢文圃閣、二〇二二）収録の神谷昌史「われらこぞりたち共榮の樂土を成さむ—『華北交通社員会』『興亜』1939～1944—占領地北京の日本語雑誌』解題」、及び戸塚麻子『『興亜』の文芸記事について』参照。

『北電』（華北電電俱樂部／北電興亜会）細目補遺²

*以下は『北電』掲載小説について（『常葉大学教育学部紀要』（第四三号、二〇二三年）巻末に附した『北電』（華北電電俱樂部／北電興亜会）細目補遺¹）の続篇である。

華北電電倶楽部

昭和一六年七月一日発行(第三卷第七号)

〈表紙〉	井上総裁・題字 折田勉・画	
〈巻頭言〉 鍛錬時代	有川博基(電気通信学院副院長)	3
中原に燦たり『北電魂』	この尊い記録に学べ!!	
第一通信作業隊座談会*1	(司会) 和田総務部長	4-7
物動計画と物資の要望に就て①	本間力	8-11
〈現業詩篇〉敢闘 I章/敢闘 II章	亀井義男	8-9
卒業を前にせる華人学生生活統計	宮本功	10-11
現地日本国民学校教育に就て	丸山修一郎(北京東城)	
第一日本国民学校	北京西城日本国民学校 校長)	12
第二回北電子供会開催	六月例会開催	12-13
華北に於ける青年運動	田辺富次郎	13
〈北支あちこち〉水都濟南	平田義三郎	14-15
〈北支あちこち〉坊子	佐藤三造	14
〈北支あちこち〉兗州	寒川井節	15
五月号雑感	X・Y・Z	15
北電春秋(一三)	和田総務部長	16
〈特輯グラフ〉中原に敢闘する村上部隊		17-20
王茅鎮の陣營にて「歌詞」	村上元紀	17-20
〈これはうまい〉	工藤直衛 岡村軍一 有田紀久滋	21
	光井信雄 山内一郎 有我豊三郎	21
〈北電漫画〉	光井生	21,27
興亜テスト回答		21

〈忙中ペン〉偶感	中野正晴(主計科)	21
〈随想〉数字	風英太郎	22
〈随想〉女と夢	村山芳子	22-23
大陸と日本映画	中代富士男	23
〈随想〉青島の生活	鈴木黙人	23-24
〈随想〉支那西北の夢	今村藤吉	24-25
〈女性の窓〉働く女性の服装のなやみ	瀬戸千代子	24-25
〈弾性波〉訓練	難波六郎	25
〈女性詩苑〉自由詩集	野露	25
〈女性詩苑〉東交民巷を歩いて	紫葉子	25
鯉のぼり〈短篇小説〉	村山直道	26-27
小さき花〈小品〉	山岡婦美子	27
〈読書〉「揚州十日記」について	早瀬瀨	28
〈読書〉読書余録(八)	渡辺音二郎	28-29
〈読書〉今月の新刊		28-29
〈読書〉趣味の中国事情研究 第一回	高橋勉	29-31
〈趣味〉謡曲の話(2)	鶴田生	30-31
〈趣味〉〈囲碁〉白先活(第五回解説)	七段瀬越憲作	30-31
〈趣味〉〈将棋〉実践に応用(第五回解説)		
〈編輯室〉	名人 木村義雄	31
〈支部通信〉		31
職域俳句会	六郎記	32
華北電友消費組合値段表		34
編輯後記	難波	34

* 1 目次には「村上部隊座談会」とある。

北京興亜青年同盟結成経過報告

準備委員 竜井理一 16-17

昭和一六年八月一日発行(第三卷第八号・創立三周年特輯号)

〈随筆〉赤絵を漁る

高木健夫(東亜新報主筆、「北京横丁」筆者) 18

〈随筆〉其国の雑誌

黄子明(中国人、東亜新報『瓜子兒』の筆者) 18-19

〈表紙〉 井上総裁・題字 吉田治・画
 〈巻頭言〉巻頭語 井上乙彦(総裁) 3

〈随筆〉内在律短歌への道

矢嶋敏一(歌人、歌誌「詩歌」同人) 19,14,15

創業満三年を迎へて

渡辺音二郎(営業部長) 4,5

道成寺〈俳句〉

遠藤梧逸 19

創立当時のこと 遠藤後一(大阪通信局長 前本社理事) 4

孫文初期の三民主義思想概説

田辺富次郎(経理部会計科) 20-21

創立三周年の感想

和田総務部長 5

電話局運営の話(6)

益田英治 20-21

社業の整備と実力涵養の秋

山根貞一(経理部長) 5

北電春秋(24)

和田総務部長 22

躍進!! 華北電々 創立三周年の業績を顧みて

浅見親(技術部長) 6-7

「グラフ」事変記念日・感激も新に一文字山慰霊祭

23

営業係同人 6-11

「グラフ」北京神社——一文字山 駅伝競走

24,25

「創業」前後 編輯部主催座談会

10-14

独ソ戦とウクライナ問題

山下乾(本社弘報室)

27

(出席者) 時古業務科長 常葉機械科長
 鹿毛主計科長 奥井会計科長 問世田業務副科長

夏の行進〈短歌〉

加藤将之(歌誌「水甕」同人、在教育総署編審会)

27

江原調理係長 竜井無線係長 武藤決算係長

「忙中ペン」時局と随筆

工藤直衛(業部業務科)

27

三崎企画係長 内野回線係長 古島電話係長

濃霧と健康の対策

浅岡義雄(青島工務事務処長)

28,29

新田施設係長 穂積武子(速記) 高橋綾子(編輯部)

「三」に因む随筆・漫筆(特輯)

28

蘭印 佐々木盛雄(報知新聞政治部員) 14-15

〈北電青年隊の結成なる〉

井上総裁 16

訓示

井上総裁 16

北電青年隊の結成に当りて

鹿毛善四郎 17

三輪洋車

宮本功(電気通信学院)

28

踏切台

三の随筆

三木満千夫(経理部主計科)

28

踏切台

望月邦平(電気通信学院)

29

「三」に因みて	燕■生*1	29	影絵綺譚	浅井昭三郎	37
窓口三寸	熊谷今朝蔵(唐山電報電話局)	29-30	〈蘭香寮の一日〉		
桃栗三年	服部五三六	30	朝/昼/夜	水瀬きく	38
三嘆の恋	亀井義男	30-31	寮生活の中から	野村津奈子	38
三の漫談	小堀泰一郎	30-31	私達のレビュー	山岡婦美代	38
三年前の二月十三日	伊藤青柿生*2	31	寮生活の感想	米山うた子	38-39
三は永遠	秋田徳三	31	たそがれ	土田恭枝	39
「三」に因む漫言	平田義三郎	32	私のお部屋	松村美沙	39
新秩序戦に於ける「三」の話題	西崎健勇	32-33	〈女性の窓〉愛嬌と媚態	如玲	40
「三」に縁のある男	岡村軍一	33	〈こども北電〉		
〈前線女子社員の生活〉	塘沽報話局同人	32	李老人〈童話〉	亀井よしを	40-41
我が局の女子部隊	馬場八十松	32-33	七日北電子供会開く 第三回		41
帰徳の女子社員			靴下のエチケット		41
〈前綿女子社員の手記〉*3			〈窓〉雑記帳から	妹田吉太郎	42-43
小包	横山菊野(太原電報電話局)	33	電話交換室〈敢闘詩篇〉	亀井義男	42-43
母	吉田栄子(濰縣電報電話局)	33	随感三題	望月邦平	42
前線の一日	木下年恵(彰徳電報電話局)	33	〈編輯室〉		42-43
その頃の日記より 三年前の保定	祖父江みち子	34-37	〈懸賞詰将棋〉実践応用の手筋(第六解説)	名人 木村義雄	42
〈読書〉趣味の中国事情研究(第二回)	高橋勉	34-35	〈懸賞詰碁〉誘ひの一手(第六回解説)	七段 瀬越憲作	42
〈読書〉今月の書棚		34		佐藤三蔵	43
〈読書〉雑記『行』六月号を読んで	秋田徳三	35	坊子小唄	富安風生選	44-45
〈読書〉北電研究雑誌第三輯(秋季号)原稿募集		35	写真ニュース		46
〈読書〉書籍用紙の部門別割当率		35	〈北電俳壇〉	吉田治(北京)	服部五三六(北京)
〈映画〉日本映画の優越	江原完	36-37	酒井青二(青島)		
〈映画〉暁の合唱〈新作紹介〉		36			

田中鵬生 (北京)	高岡斗柿生 (北京)	矢真白 (北京)	10-13
里深弘 (天津)	渡辺音二 (北京)	穂積武子 (北京)	10-11
山岡婦美子 (北京)	伊藤青柿 (北京)	佐々木国之助 (北京)	12-13
関口藤堂 (北京)	伊藤秋村 (北京)		
芋田孤竹 (北京)	長塩君 (天津)	佐藤照喜 (兗州)	14-15
問世田ますを (北京)	御牧保男 (北京)	友田大夜 (北京)	14-15
佐藤三蔵 (濰縣)	古池有 (学院)	西谷宏 (学院)	15
鈴木日出夫 (学院)	富安風生	難波	16-17
選後小感	富安風生	難波	17
〈編輯後記〉			18-19
* 1 ■は言偏に「包」。目次では「鮑」となっている。			19
* 2 目次には「伊藤青柿」とある。			20
* 3 「前綿」は「前線」の誤植か。			21
昭和一六年九月一日発行 (第三卷第九号)			22-23
〈表紙〉	井上総裁・題字	高屋正武・画	24
〈巻頭言〉聖戦・会社・雑誌「北電」	村上元紀		25
会社機構の改革と総局事務の執行に就て	総裁	井上乙彦	26-27
会社機構改正要綱		梨本祐平	27
米国の資金凍結と華北経済の進路		浅岡義雄	28-29
職域常会〈社業随想〉		秋田徳三	29
電報新編売捌の体験を語る〈社業随想〉			30
物動計画と物資の要望に就て②	小林二郎 (搬送料)	益田英治	10-13
〈忙中ペン〉技術屋の良心			10-11
電話局運営の話 (7)			12-13
国家資金動員計画と我が社資金運用計画に就て (1)	田辺富次郎		14-15
局内隣組の結成〈社業随想〉	中川恭漢		14-15
山居〈俳句〉	富安風生		15
〈北電青年〉	斎藤泰全		16-17
天壤無窮の自己を認得せよ			17
創立三周年記念式典			18-19
〈地方だより〉			19
北京・太原間 電話開通	和田総務部長		20
北電春秋 (25)			21
〈グラフ〉噫！躍進の人柱 物故社員慰霊祭			22-23
〈グラフ〉三周年・自粛の祝典			24
〈グラフ〉われらの運動場建設 北電青年隊の勤勞			25
〈こども北電〉			26-27
恋の黒白〈特別読物〉	村上知行		27
北電と小生	懸橋浅夫		28-29
〈特輯〉新涼よみもの〈阿媽の話	園田武男		28-29
どうかと思ふ話〈社業随想〉	鈴木黙人		29
朝の書齋〈内在律短歌〉	前田夕暮		29
焦眉〈内在律短歌〉	矢嶋欽一		30
現場の声〈社業随想〉	梅田宗一郎		30
〈特輯〉新涼よみもの〈或る電話交換監督の話			

〈特輯 新涼よみもの〉空を飛ぶ	山城敏一	30-31	〈支部通信〉		42
〈特輯 新涼よみもの〉四月一日の電報	青山翠	31	〈編輯後記〉	難波 芋田	42
〈女性の窓〉秋立つ日の感懐	泊三四郎	32	北電興亜会発行		
〈特輯 新涼よみもの〉鮎	西山君枝	32	昭和一六年一〇月一日発行(第三卷第一〇号)		
太廟「短歌」	与田猛	33-35	井上総裁・題字	川沢次郎・画	
〈特輯 新涼よみもの〉	梨本祐平	33	華北電信電話株式会社	社歌	
慰問の綴方〈Radio Drama〉	村山直道	34-35	〈巻頭言〉残されたる機構改革	作詞・大木惇夫 作曲・古関裕而	2
この脚本の出来る迄	北電児童文化研究会	35	東ヨーロッパに角逐する独ソの実態を衝く	和田総務部長	3
〈読書〉趣味の中国事情研究	高橋勉	36-39	山西旅行記	和田総務部長	6-7
〈読書〉今月の書棚	小林謙	37	「聞喜城」抄「短歌」	小泉菱三	7
〈読書〉北京の本屋	寒川井節	38	物動計画と物資の要望に就て③	本間力	8-9
〈窓〉鳩と子供	馥田郁二郎	38	我が闘争の売行聖書以上(米国)		9
〈窓〉とうもろこし	佐藤三蔵	38-39	新秩序学校(独逸)		9
帝王の歌〈詩〉	近木健次	38	第二回電信競技会開催状況に就いて	営業部業務課電信係同人	10-11
このころ〈短歌〉	長岡善一郎	39	講評	会長 渡辺音二郎	11
〈窓〉一輪車と夕焼雲	佐藤照蔵	39	天津英仏租界概観	鏑木安善(天津中央電報局海大道分局長)	12-13
〈北電漫画〉	光井生	39	此処に無駄あり〈社業随筆〉	中川恭漢(北京中央電報局営業課長)	12-13
丫頭(ヤア・トウ)の話	高橋綾子	40-41	ソ聯の実相と独ソ戦の展望	山下乾(総務部資業室)	14-15
新人の友〈現業短歌〉	木村好之助	40-41	電話局運営の話(8)	益田英治	14-15
〈編輯室〉	名人	41			
〈将棋〉手駒の活用(第七回解説)	木村義雄	41			
〈囲碁〉ハネの妙味(第七回解説)	七段 瀬越憲作	41			
仕事雑考	南一	41			

時局と芸術〈随想〉	小林謙	15	〈随想〉病院だより	呉正雄	34
〈北電ニュース〉	16-17	16-17	〈女性の窓〉礼儀	青山翠	34
営業部だより	村山生	16-17	文化映画片語〈随筆〉	平井武	35
〈北電青年〉	18-19	18-19	〈読書〉趣味の中国事情研究(4)	高橋勉	36-37
研究雑誌原稿募集			〈読書〉面白いロシアの本と悲痛な日本の書物〈随筆〉	高屋正武	36
	総務部文書課調査係「研究雑誌」編輯部	18	〈編輯室〉		36-37
北電春秋 26	和田総務部長	20	〈読書〉「読書余録」「電話物語」のこと	渡辺音二郎	37
〈特輯グラフ〉	黄土にみゆる	北電黄村農場を観る	戦線便り	岩佐鉄也	37
川沢次郎・撮影	21-23	21-23	お知らせ		
〈特輯グラフ〉	お芋を掘つて子供は健康	24	〈連載小説〉凡作の縁談(第一回)	水島杏介	38-39
〈こども北電〉		25-28,29	九月号 北電月評	槍騎兵	38-39
国民学校の先生方と一・二年のお母様方の座談会		26-31,35	編輯室にて「詩」	亀井義男	39
不易の命〈短歌〉	早瀬讓	27	記録宣伝用写真 懸賞入選発表	文書科弘報係	39
〈こども北電〉	北電子供会の在り方〈随筆〉		〈支部通信〉		40-42
蝶川内満(北京東城第一日本国民学校)	28-29	28-29	〈将棋〉解決の鍵(第八回解説)	名人 木村義雄	41
珍妃〈物がたり〉	赤間英夫	30-31	〈囲碁〉中央に手あり(第八回解説)	七段 瀬越憲作	41
青島駄話	鈴木黙人	31	日蝕―短章集―「詩」	亀井義男	42
〈随想〉山西の月	有田紀久滋(営業部業務課電話係)	32	〈句会通信〉天津川柳会報		42
〈随想〉九月の記	寒川井節(兗州電報電話局)	32	〈編輯後記〉	芋田吉太郎	42
〈随想〉貧乏談義(びんぼうのはなし)					
安部正(総務部育成課錬成係)	33	33	昭和一六年一月一日発行(第三卷第一一号)		
〈随想〉唯神実相論	秋太郎(営業部業務課国際係)	33			
〈忙中ペン〉毒の研究	伊藤亀寿(育成課)	33	〈表紙〉	井上総裁・題字 川沢次郎・画	2
俳句五人集	高岡斗柿生 服部五三六		華北電信電話株式会社 社員生活申合せ十五齋		
	芋田孤竹 難波六郎 田中鵬生	33			

〈巻頭言〉北電興亜会の理念			
中田治藤（興亜会事務局長）	3	中国事情の紹介	1
日華人融和の具体的方策を論ず 創立三周年記念		月光抄〈俳句〉	
懸賞論文二等一席 与田猛（営業部業務課）	4-11	北電春秋	27
創立三周年記念懸賞論文当選者	9	〈特輯ぐらふ〉北電鍛錬くらげ	
電話局運営の話（9）		〈こども北電〉僕等も運動会	
指導者・団体・力		〈こども北電〉日蝕〈童謡〉	
益田英治	12-13	〈こども北電〉かみなり	
新田正男	12-13	莫逆〈短篇小説〉	
高木仁	14	〈俳句四人集〉	
高橋集三郎	14-15	高岡斗柿生 田中鵬生 服部五三六 渡辺音二	27
田辺富次部*1	15-17	〈どくしよ〉趣味の中国事情研究（5）	高橋勉
村上不蔵（北京中央電話局市外交換課）	15	〈詩〉立花一英 矢真白 大野しづく	29
〈社業随想〉電話託送電報の料金計算につきて		俳句 富安風生選	30
服部勇	16	秋雑詠 服部五三六（北京） 田中鵬生（北京）	
北電風物詩〈歌謡〉		酒井青二（北京） 渡辺音二（北京） 阿部凡童（天津）	
短歌 小泉荃三選	16-17	阿部五月（天津） 里深弘（天津） 山岡婦美代（天津）	
山本猛（済南） 藤村雄平（北京） 木村好之助（北京）		岩島燕■*2（北京） たかし（済南） 真喜屋野風	
日向すみ子（北京） 柴山竜司（大阪） 大畑たい		（北京） 緒田逸朗（北京） 佐藤三造（坊子）	
（北京） 乃武夫生（済南） 杉山幸子（北京）		寒川井節（兗州） 種子田種義（天津）	
鈴木黙人（青島） 奥村幸三郎（天津） 野村ツナ子		柴山竜司（○○○）	
（北京） 種子田種義（天津） 松原蕙子（東京）		扇・日覆・雑詠	
選後に		松尾世露（昌黎） 服部五三六（北京）	
編輯部より		渡辺音二（北京） 青野正明（北京） 田中鵬生（北京）	
十月号 北電月評 北電文化集団結成について		伊藤青柿（北京） 佐藤三造（坊子） 荒谷耕山（学院）	

- 〈連載小説〉凡作の縁談(第二回) 立花一英 30-31
 電話西分局だより 中谷正楠(北京中央電話局西分局) 31
 古陶と老掌櫃―太原大中市古玩舖邇達〈短歌〉
 上田官治(歌誌「黄土」同人、太原日本高女校長) 31
 〈婦人欄〉銃後の家庭生活 山崎琴(北京友の会) 32-34
 〈婦人欄〉〈女性の窓〉母親の悪口 三杉恵 33
 〈編輯室〉
 〈婦人欄〉大興へ楽しい芋掘りに 在京日華女子社員 34-35
 鍛錬会 北京中央電話局交換課同人 35
 〈婦人欄〉運動会の前後 上田美恵子(蘭香寮) 35
 〈婦人欄〉短歌・芋掘り 上田美恵子 秋野サキ子 35
 〈北電ニュース〉 36-37
 〈学院だより〉 36
 〈北電青年〉 38
 興亜錬成所生を迎へて 竜井理一 38
 研究雑誌原稿募集 39
 〈支部通信〉 40-42
 〈営業部だより〉 村山生 40-41
 〈軍事郵便〉 42
 〈囲碁〉看過しがち(第九回解説) 七段 瀬越憲作 42
 〈編輯後記〉芋田吉太郎 42
- 昭和一六年二月一日発行(第三卷第一二号)
 〈表紙〉 井上総裁・題字 川沢次郎・画
 〈巻頭言〉死胡同 渡辺音一郎(営業部長) 3
 社員精神の作興を論ず 創立三周年紀念懸賞論文
 二等推薦 有田紀久治(営業部業務課) 4-9
 〈治強運動特輯〉第三次治安強化運動と中共の経済工作
 今村藤吉(本社総務部文書課弘報係) 10
 畏し宣戦の大詔を拝し 北電・鉄壁の決戦体制成る
 通信兵力としての使命に邁進 10
 訓示 井上総裁 10
 北電春秋 28 和田総務部長 11
 抗戦支那の経済を通して米国の敵性を暴く
 今村藤吉(本社総務部文書課弘報係) 12-13
 法規と中国人〈隨筆〉 13
 齋藤清衛(文学博士、北京女子師範学院教授) 13
 街路名呼称統一のことも 13
 三上金太郎(本社営業部企画課作業係長) 14-15
 電報と華人 宮本功(天津中央電報局営業課長) 14-15
 有線自働受信機を無線自働回線に使用した話 15
 押野貞夫(済南総局副局長) 15
 物動計画と物資の要望に就て④
 本間力(本社経理部財産課契約係長) 16-17
 国家資金動員計画と我が社資金運用計画に就つ(一)
 田辺富次郎(経理部予算課) 16-17

* 1 目次では「田辺富次郎」

* 2 ■は言偏に「包」。

- 電話局運営の話 (10) 益田英治 (石門電報電話局長) 17
 中国事情の紹介 2 育成課輔導係 18-19
 育児徒然 庄司常三郎 (北京中央電報局) 18-19
 明朗地区張店の現況 茂呂壮平 (張店電報電話局長) 19
 〈石門新社紹介〉
 石門の北電社宅 新市街に異彩を放つ 20
 石門北電社員住宅新築工事概要 20
 新宿舎に住みて 佐藤忠雄 (石門電報電話局) 20
 〈画報〉青島北電社員社宅 21
 〈画報〉青島素描 秋田生 川沢次郎・撮影 22-23
 〈画報〉興亜の暁に契る 北電興亜会結婚 24
 北京に於ける鬪狐仙の実話 赤間英夫 (朝日新聞北支那支局) 25
 〈随想と雑筆〉
 賛成議員 奥井斎松 (本社経理部会計課長) 26
 高倉テルの「大原幽学」 北京居留民団議員) 26
 年末有感 高屋正武 (本社総務部文書課弘報係) 26
 中本辰夫 (本社営業部企画課企画係) 26-27
 戦場 与田猛 (本社営業部業務課国際係) 27
 北京風景 服部五三六 (北京中央電報局営業課) 27-28
 遠藤後逸先生ホトトギス同人推薦祝賀俳句会之記*1 27
 朝〈詩〉 江原完 28
 〈随想と雑筆〉
 お祖父さんと孫
- 園田武男 (本社営業部業務課国際係) 28-29
 冬日雜記 立花一英 (電気通信学院) 29
 あの頃の頃 高木仁 (北京総局会計課) 29-30
 親切 風英太郎 (北京総局会計課) 30
 輸血報国 伏見光江 (天津中央電話局) 30
 新しき剣〈散文詩〉 亀井義男 31
 〈忙中ベン〉情熱の貧困に就いて
 前島茂治郎 (北京中央電話局庶務課) 31
 〈治強運動特輯〉第三次治安強化運動放送演劇脚本
 明日は晴れ 村山直道 (営業部業務課国際係) 32
 〈趣味〉尺八談叢 (しやくはちのはなし) 32
 片岡幻山 (本社文書課庶務係長、都山流師範) 34
 〈女性の窓〉女らしさを持つ 杉ひや子 34
 〈女性の窓〉ひとりおもふ
 米山うた子 (北京中央電話局) 35
 〈趣味〉天津・桃の実会を語る 門馬たつを 35
 〈読書〉趣味の中国事情研究 (6) 高橋勉 36-37
 〈読書〉新刊紹介 36
 〈編輯室〉 36-37
 〈読書〉女性の読書 西山君枝 (経理部会計課) 37
 〈読書〉新着紹介 37
 〈北電ニュース〉 38-42
 〈軍事郵便〉 39
 〈編輯後記〉 芋田吉太郎 42

〈特集グラフ 大東亜戦争現地報告〉			
感激の同胞 涙の万歳			23
大東亜戦争現地報告			24-25
敵性権益把握			26
農村挺身記		泉田保只 (大興送信所)	27
青島総局だより			27
〈随想と小品〉			
排球礼賛	竜井理一 (本社総務部育成課錬成係長)		28
現業員と布施	五百倉義雄 (天津中央電報局長)		28
神に祈る心	井上逸機 (済南電報電話局長)		28-29
勤労奉仕記	高橋集三郎 (電気通信学院)		29
俳句 富安風生選			29
田中鵬生 (北京) 渡辺音二 (北京) 服部五三六 (北京) 高岡斗柿生 (北京) 仙石柑舟 (北京)			
後藤柿村 (北京) 矢真白 (北京) 友田大夜 (北京)			
呉正雄 (東京) 五塔哉爾 (北京)			
〈随想と小品〉			
英雄交響曲	三木満千夫 (本社経理部予算課)		30
炉辺雑記	青山翠 (本社総務部)		30
結婚の記	青野正明 (本社総務部文書課文書係)		30-31
断の一字	寒川井節 (兗州報話局)		31
生活の頁	西山君枝 (本社経理部会計課)		31
新しい「モラルに」就いて	前島茂治郎 (北京中央電話局)		32
正月漫筆	山城敏一 (北京中央電話局)		32
随想	藤村雄平 (北京中央電報局)		32-32
校正雑筆	芋田生 伊藤 吉田		33
〈総局だより〉太原／北京			33
大陸に於ける未婚男女の生活を語る (座談会)			34-35
〈出席者〉略			
難波厚生係長 芋田吉太郎 (編輯部) 高橋綾子 (編輯部) 吉田治 (編輯部) 穂積武子 (速記)			
ふるさとへの便り	北京中央電話局交換課同人		36-37
〈読書〉趣味の中国事情研究 (7)	高橋勉		38-39
〈読書〉青島中電文庫の設立に就て	青島中電文庫賛助会同人		38
内在律短歌 矢島 ^{トマ} 歎一選			39
有田紀久滋 (北京) 朝倉硬 (天津) 矢真白 (北京)			
江原完 (北京)			
内在律短歌の選に当つて	矢島 ^{トマ} 歎一		39
〈葉書回答〉*3			40-41
石川順 (大阪毎日新聞社北京支局長) 平田小六 (作家)			
石原巖徹 (北京風俗研究家 俳人・川柳作家)			
早瀬讓 (東亜新報社編輯局 歌人) 城所英一 (華北交通資業局参与・歌人) 吉田潤 (写真作家)			
小倉東次 石橋丑雄 (中国研究家 北京市公署嘱託)			
斉藤清衛 (北京女子師範学院教授・文学博士)			
加藤新吉 (「北支」編輯主幹)			
高木健夫 (東亜新報主筆) 一氏義良 (美術評論家)			
坂井徳三 逸名氏 江崎磐太郎 (作家) 安藤更生			

昭和一七年二月一日発行（第四卷第二号、通卷第三〇号）

加藤将之（教育総署直轄編審会副編纂、文部省図書

監修官） 佐藤とし子（作家） 金光昭（本社営業部企

画課長） 小泉麥三（北京師範大学教授・歌人）

松本光庸（華北電影公司宣伝課長）

短歌 小泉麥三選

40-41

藤村雄平（北京） 茂木かよ子（北京）

木村好之助（北京） 矢真白（北京） 会田昌史（北京）

種子田種義（天津） 杉ひさ子（北京）

上田美絵子*4（北京）

選後に

〈ラヂオ風景〉まゝころ

小泉麥三 40-41
村山直道 42-43

青島総局だより

〈北電ニュース〉

43

〈こども北電〉

44-45

〈囲碁〉捨石が眼目（第一四解説）*5

七段 瀬越憲作 46

〈将棋〉犠牲に活きる（第九回解説）

名人 木村義雄 46

〈編輯後記〉

芋田吉太郎 46

〈表紙〉 井上総裁・題字 川沢次郎・画

大東亜戦争と北電興亜会運動 和田中央本部長 37

感激を新に献身的努力を捧げん 井上総裁 45

— 大詔奉戴式に於ける訓話—

大東亜戦争と太平洋のケーブル 時吉秀雄（青島総局長） 6-7

〈社業随筆〉電報配達 三上金太郎（企画課作業係長） 8

〈社業随筆〉通話度数と通話時数

宮原和泉（北京中央電話局市外交換課長） 89

大東亜戦争と国際電報 営業部業務課国際係 9

〈社業随筆〉手働局市内交換に於ける一考察 佐野生（北京中央電話局） 9-10

〈社業随筆〉営業譲渡と加入移転 宮原和泉 10-11

〈社業随筆〉電報名宛の記載廃止に就て 中川恭漢 11

職場協力会と庶務 総務部庶務係 12-13

職場協力会に就て 中川恭漢（北京中央電報局） 13

〈北電青年〉

決戦体制下の雄叫び 青年隊弁論大会開催さる 14

青年隊に寄す 渡辺音一郎 14

〈声〉雑感 一青年 14

偶感（弁論大会要旨） 安部正（第一分隊） 14

日華民族運動の発展（弁論大会要旨） 中本辰夫（第二分隊） 15

*1 目次には「瑛」とある。

*2 回答者略。目次に「地方局課長」とある。

*3 目次に「諸名士」とある。

*4 正しくは「美恵子」か。

*5 「第一回」の誤植。

華北の土となれ (弁論大会要旨)	15	山本猛 (濟南)	上田美恵子 (北京)	都築光子 (青島)
華北を想ひ決意を述べ (弁論大会要旨)	15	永山盛太郎 (天津)	杉山幸子 (北京)	福田清 (太原)
職場より見たる社業の合理化を論ず (上) 創立三周年	15	丘雅代 (天津)	一淋子 (北京)	
紀念懸賞論文二等推薦 園田武男 (営業部業務課)	16-20	選後に		
東亜解放〈短歌〉	20	思ひ付き三題	小泉菱三	30-31
有線無線	20	中国事情の紹介	岸本春美	31
興亜の旗の下に「グラフ」	21	新春北電子供大会	育成課輔導係	32-33
天橋「グラフ」	22-23	大東亜戦争〈俳句〉		32-33
決戦下の防空演習「グラフ」	24	育兒徒然	3	伊藤青柿 高岡斗柿生 田中鵬生
北電春秋 (第三十回)	25	転入電話事務員をかこんで〈座談会〉	二宮七太郎・記	34-35
十二月八日〈詩〉	26-27	榮養に関する一般常識	1	高橋秀松 (第三北電寮々司)
大東亜戦争と華北の子供達〈放送原稿〉	26-27	〈随想と雑筆〉戦争俳句の根本観念		江原完 (北京総局線路課)
〈随想と雑筆〉職域雑記	28	〈窓〉仕事偶感		一貫茶 (北京中央電報局)
〈随想と雑筆〉青春	28	〈窓〉雑感		高木仁
〈新年俳句会〉	28	〈窓〉電線〈詩〉		山城敏一
〈新年短歌会〉	29	〈北電ニュース〉		38-42
〈随想と雑筆〉前線日誌	29	〈忙中ペン〉訓練偶感	沖田勇 (濟南総局管理課)	39
独楽〈詩〉	29	征途 佐賀美夫氏を送る歌「詩」	有田紀久滋	40
断食療法体験記	30-31	〈囲碁〉白を誘つて (新年号解説)	七段 瀬越憲作	42
短歌 小泉菱三選	30-31	〈将棋〉駒の運用 (新年号解説)	名人 木村義雄	42
藤村雄平 (北京)		編輯後記	芋田吉太郎	42
茂木かよ子 (北京)				
光井乃夫 (濟南)				
杉ひさ子 (北京)				

昭和十七年二月一日発行（第四卷第一二号・通巻第四〇号）

・大東亜戦争一周年特輯号）

〈表紙〉	井上総裁・題字 吉田治・画		
〈訓示〉大詔奉戴一周年を迎へて	井上乙彦（総裁）	3	
大東亜育成の使命	高木富五郎（東亜新報論説委員）	4-5	
この決意	大政翼賛会宣伝部作詞	5	
富士山〔詩〕	八十島稔	6	
〈特輯大東亜戦争一周年 十二月八日を迎へて〉			
その日を迎へる頃	清水十濟（済南総局線路課長）	6	
職場攻勢の実践	五百倉義雄（天津中央電報局長）	6	
銃後の勇氣	中川豊	6-7	
『真珠』	ババソマツ（帰徳電報電話局）	7	
自己の革新	柴田勝志（通州電報電話局長）	7	
日本の偉大なる姿	浅見親（本社技術部長）	7	
〈特輯大東亜戦争一周年 十二月八日を迎へて〉			
十二月八日を迎へて	井上逸機（済南電報電話局長）	8	
十二月八日を迎へて	水津多喜熊	8	
所感	田中忠次郎（連雲港電報電話局長）	8	
更に鍊成、挺身を誓ふ			
	平田義三郎（青島中央電話局長）	9	
大東亜宣戦一周年	渡辺音二郎（本社営業部長）	9	
〈特輯大東亜戦争一周年 十二月八日を迎へて〉			
十二月八日を迎へて	佐藤五郎（北京中継所長）	10-11	
新しき歴史の表情	生駒友三（開封電報電話局）	10-11	
銃後の進撃	高木仁	11	
大詔奉戴一周年記念日に当りて	村上総務部長	11	
〈特輯大東亜戦争一周年 十二月八日を迎へて〉			
大東亜戦争一周年を迎へて	牛島富雄（太原総局管理課長）	12-13	
〈十二月八日・あの日の感激〉			
宣戦詔書渾発の日	八十島稔	12	
十二月八日	長田恒雄	12	
憤懣の腫物	笹沢美明	13	
十二月八日	北園克衛	13	
〈特輯大東亜戦争一周年 十二月八日を迎へて〉			
十二月八日を迎へて	河村信男	13	
十二月八日の感激	服部五三六	14	
その朝の記	藤村雄平（開封電報電話局）	14-15	
健軍七十年 勝ち抜かう大東亜戦	長塩昇	14-15	
十二月八日〔短歌〕	木村好之助	15	
想へ十二月八日よ〔詩〕	亀井義男	15	
〈治強運動に策応する青島興亜会の進軍譜			
二つの講演会に就て〉			
私の生活革新〈葉書回答〉			
木村好之助（芝罘） 田中忠次郎（連雲港電報電話局長）		16	
千葉伊三郎（輪次電報電話局長） * 1 平賀健		17	
（太原報話局） 中桐精二（青島総局） 奥村小市			
（徐州報話局長）			
雑記 職場に	増田忠二	17	

北電春秋(第四十回)	和田経理部長	18	寒風を衝いて 郷軍及一般社員の射撃大会	35
〈特輯グラフ〉北に呼応する新圏の建設	19-22		大東亜戦争・勝利の日誌	35
経営講和 2	和田生	23	〈家庭生活〉働く母の育児日誌抄	高橋綾子 36-37
映画遍路 濟寧から東隴海線へ	宮本興治	24-15	〈家庭生活〉お餅はなぜもたれるか	36
〈特輯大東亜戦争一周年 十二月八日を迎へて〉			土箱(4)	璋好 37
戦ひ抜かむ〈短歌〉	池川純平(国民文学同人)	25	川柳戦陣訓(二)	長塩昇 38
歴史的現実と文学	井口創(「開発」編輯部)	26-27	冬の肉料理は—こんな点に注意—	38
剣道慨論	天津劍道生	26-27	〈編輯余滴〉菅原隆男 吉田治 高橋綾子 芋田吉太郎	38
仏像と侠匪	夏目一拳	27		
愛と、強者への正覚	奥村幸三郎	28-29		
昭和徒然草	水原さと	28		
十二月八日〈詩〉	大野せいし	28-29		
「忙中ペン」に与ふ〈詩〉	亀井義男	29		
〈読書〉				
私の濫読法	杉田直樹	30		
〈婦人と読書〉文芸に偏るな 科学的知識の向上を				
—勤労女子青年群へ—				
谷野せつ(厚生省労務監督官補)	30			
湖南の兵士 沈從文作 大島覚訳	30			
今月の新刊		30-31		
武藤勝彦著『地図の話』	中野好夫	31		
二面だ	内山完造	31		
転入電話事務員に聴く華北と職場	済南電報電話局	32-33		
東京だより		33		
庭球王国 北京の覇者となるまで	北電庭球部	34-34		

* 1 「輪次」は「楡次」の誤りか。

本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)「日中戦争期華北の未公開資料の調査・公開と総合的研究」(課題番号 21K00315)(代表者・戸塚麻子)及び「中国国家図書館所蔵の主要日本語雑誌(戦前期)の総目次作成」(課題番号 20K00357)(代表者・竹松良明)の研究成果の一部である。